

松陰

談話室

第 9 号 1985. 4

大学図書館の機能と要望

文学部教授 村 田 正 志

国士館大学に限らず、どこかの大学の図書館でも、その設備なり機構なりを考えると、容易でない難しい問題がある。それはその利用目的が多方面にわたるからである。勿論大学は、学生の勉学を主要な任務とする場であるから、学生の日常の勉学の手引きとなる啓蒙書・参考書・百科辞書類の書籍が完備されるべきである。

本学図書館も、それに属する書籍は一応整備されている。しかしそれだけでは、高校の図書館や区民図書館と異なるところがないといわざるを得ない。

大学の勉学は、教室で教授から教えられたものだけを理解習得すれば足りるというものではなく、教授から提示され、研究のメトータ及び価値について啓発され、それを基礎にして、自らが選んだテーマについて考究すべきである。それを研究と称するのである。

そこで大学図書館も当然それに対応すべき設備と蔵書を整えねばならぬ。それには、学問の各分野における基本図書をまず整備せねばならぬ。本学に文学部が設置され、史学地理学科内に国史学専攻が創設された当初、わたくしは要請により、国史学を中心とする基本図書の至急購入すべき書目の作成、また購入の手段方法などにも奔走した。

基本図書は一般教養書と異り、直ちに入手可能

というわけにはゆかず、また高価でもあり、容易でない。幸いに当時の図書館長阿部秀夫教授とは水魚の交わりを結び、私見を十分に理解されて、その後数年間にほぼ要望は満たされた。国史大系・群書類従・古事類苑・読史備要は勿論の事、国書刊行会叢書・大日本史料・大日本古文書・史料大成・史料纂集・大日本仏教全書なども備えられ、また辞典類も一級品でないと用が足らぬとの考えから、その整備を促した。

辞典類に平行して、重要性を感じるのは書目関係の図書である。本学図書館は、この方面に特に留意の要があるのではあるまいか。戦後の刊行にかかる図書総目録はもとより必須のものであるが、内閣文庫目録・官内行書陵部図書目録・史料編纂所図書目録・神官文庫図書目録・新纂禅籍目録・真福寺善本目録・天理図書館目録・尊経閣国書漢籍分類目録など枚挙に遑がなく、また特殊ではあるが、東大寺文書目録・東寺百合文書目録・日本古写経綜鑑・日本古経現存目録なども望ましく、文化庁の国宝重要文化財総合目録も必ず具備せられたい。

ところで、なお我々教職にある者の立場から、一步踏み込んだ意見を述べておきたい。大学図書館は学生だけの利用に限らない。したがって先に述べたような基本図書及び研究書・参考書だけで

事は足るとは考えられず、教授や研究者の要望にも応じてもらいたい。その対象は概ねいわゆる稀覯本に属し、また唯一無二の文化財原本でもある。

明治以降写真の発達に伴って、重要な古文書の複製が続々行なわれ、それが或は叢書、或は単独に刊行されたものが多い、国史学方面に限っても、史徴墨宝・古簡集影・古文書時代鑑・宸翰集・宸翰英華・尊経閣叢刊・金沢文庫本図録・天理図書館善本叢書・陽明世伝・陽明叢書・古典保存会複製書・貴重図書複製会叢書・禅林墨蹟・訪書余録・旧刊影譜・正倉院御物図録など総合的なもの、また兼方本日本書紀・御堂関白記・河内本源氏物語・看聞御記・蒙古襲来絵詞・古語拾遺・後醍醐天皇宸翰集・光厳天皇遺芳・豊大閤真蹟集・来迎院本日本霊異記・近衛家大手鑑・高松宮手鑑・武家手鑑・教行信証・日蓮上人真蹟集などこれ亦枚挙に遑がない現状である。これらのものは、いずれも豪華本であり、部数に限りがあり、再版はほとんどないと覚悟せねばならぬ。かような類のものは特別の場合もあるが、概ね個人で購入所持することは不可能に近いのであるから、図書館架蔵のものに依るほかない。それを五年十年に一人二人の特志家が見るにすぎないから、購入に及ばぬなど

と敬遠されては、大学図書館としての意義を失うと思う。

次に少々私見にすぎるとは知れないが、わたくしは本学で年来古文書を講じているが、本学にも古文書・古典籍の原本古写本の然るべきものが、せめて三、四点余は所有して教材に充てたいものと常々考えている。本学文学部には今のところ予定はないようだが、さて大学院の設置ともなれば、このままで如何に対処するのであろうか。寒心の至である。

わたくしは国史学専攻の主任教授在任中、この点を憂慮し、まず身近な研究室の充実を志し、容易に得がたいと思われる稀覯本を、資金の許す限り極力購入具備し、春・夏・冬の休暇には、自らの顔の利く全国にわたる社寺諸家に赴いて、古書古文書の撮影蒐集につとめ、今日の国史研究室の至宝たる研究資料が生れた次第で、早稲田大学荻野研究室所蔵文書に比較すべきもないが、しかし一般には容易に披見が許されぬ写真もあり貴重である。これには今も同室の佐々講師及び元学生主事阿部常三郎氏の献身的援助の賜物であり、忘れがたい記念物でもある。

著者からひとこと

最新 図書館学事典

学芸図書〔010.1033-Ku84〕

前図書館長 草 野 正 名

第二次世界大戦後、わが国の図書館学は広く学界の中でも急速の進歩を遂げつつある。それを裏づけるものの一つとして、慶応義塾大学文学部図書館・情報学専攻の修士・博士課程、東京大学と京都大学における図書館学講座の修士・博士課程、また図書館情報大学修士課程をはじめ、多くの大学に設けられている図書館学講座などがあげられる。標題図書は、こうしたわが国における図書館学の進

展してゆく学問的動向のなかで、図書館学に関する新旧の基本的用語を、巻頭の体系索引とともに編成した専門事典で、この事典に収録された約3,800語の用語は、図書館学、情報処理関係、それに図書（書誌）学関係などの広範囲にわたり、さらに図書館の運営・実務・学習などに関連して多面的に利用できる編集となっている。

今、私は大学で過した四年間を回顧してみると、図書館で過した日々は、私にとって忘れ得ないものとなりました。

私の一日は、朝、図書館に行って数社の新聞に目を通すことから始まりました。と申しますのは、私はゼミで「中東問題」をテーマに勉強していたので、「パレスチナ問題」、「イラン・イラク戦争」、「石油問題」などを中心に問題別或は各国別に分類して、新聞記事のファイルを作っていました。

今日、変転極まりない国際政治を勉強するには過去に刊行された書物だけに頼っていたのでは過

去の歴史を勉強するだけに止まり、事足りない面があります。ファイルを作ることによって、難解といわれている「中東問題」にもアプローチできたと思います。そして、新聞の切り抜きやコピーをファイルしていると、専門雑誌などにも目を向けるようになり、その都度コピーした雑誌の論文も、卒論作成時にはかなりの量になり、大いに役

立ちました。このようにして、毎日少しでも図書館を利用したので、レポートや卒論を書くうえで幅ができ堀り下げて書くことが出来たと思います。

そうこうしている間に、大学生活もはや終わりを告げようとしています。大学において何を求めるのかは、人それぞれだと思いますが、求める道を誤ってはいけないと思います。大学とは、自ら

自由に学ぶところではないでしょうか。大学生活は、往々にして日々安逸となりがちで、標なきまま卒業式を迎えてしまい「シマツタ」と思ったときには、あとの祭りというのが正直なところではな

いでしょうか。また、試験のときだけ図書館に足を運ぶのではなく、その気になって探せば、図書館の中は宝物で満ちあふれていると思います。そして、決して受け身にならずに、自ら求めることによって、後輩の皆さんにも学問の素晴らしさや喜びを知って頂きたいです。それは必ず皆さんの人生にとっての礎になろうかと思われるのです。

図書館とともに 歩いた日々

政経学部政治学科4年
内田 宏高

レファレンス

図書館では、みなさんからの質問に、資料をもとにお答えしています。

質問 一条兼良の神儒仏一致論について知りたい

回答 一条兼良が神儒仏一致論について述べていることは初耳だったので、確認のため事典をみる。いま刊行継続中の『国史大辞典』（吉川弘文館）に簡単に触れた文が見つかる。この項の筆者は永島福太郎氏であるが、彼には『一条兼良』（吉川弘文館）の著書があるから、これに具体的な記載があるかも知れないと考え当たってみると、「その達したところは神儒仏三教一致の思想である（『日本書紀纂疏序』）」とあった。これによって、『日本書紀纂疏序』の中で兼良が神儒仏一致論について述べて

いることがわかるから、『日本書紀纂疏』に関する文献をこれから探せばよい訳である。そこで『日本人物文献目録』（平凡社）をみると、『歴史地理』77巻3号に坂井誠一氏が「一条兼良と日本書紀纂疏」を執筆していることが分かった。さらに外にもないかと考え、『国文学年次別論文集』（朋文出版）をみると、板野哲氏の「一条兼良と『日本書紀纂疏』（一）」（『新居浜工業高専紀要』16号）が収載されていた。なお、『日本書紀纂疏』は『天理図書館善本叢書と書之部』（天理大学出版部）に収録されているから、原文の方も簡単にみることができる。

資料探訪の技法

図書館 渡辺 美好



なにかを調べようとして、関係のありそうな文献をいざ探してみると、そのものズバリというお話し向きは中々出てこないのが普通である。ましてや先行研究のない新しい主題であるとか、アプローチを変えて独自性を多少とも発揮したいために、毛色の違った資料を求め大小の図書館を尋ね歩いたとしても、所蔵されていない場合が多い。

小稿は、文献を探すときに現場で起こる問題を、学生諸君を対象として実利風に述べたものである。



収集の取っかかり

文献を手に入れるには、それに関する手掛かりを掴むことから始める。

書誌を十二分に活用すれば、公刊された文献なら相当程度に所在を把握できると思う。この場合、書誌にはそれぞれ特性があるから、それを踏まえて利用しないと、膨大な文献の海から目的に合った一つを発見することは、意外と難しいかも知れない。さらに書誌を相互にクロスしたり、私家本や他の書冊の一部として掲載されたものまでを使いこなすとなると、慣れと共にある目配りが必要になってこよう。

書誌調査は目の疲れと肩凝りの酷い決して楽な作業ではないが、それにとにかく耐え、関係のありそうな書誌をまめに調べること。基本を忠実にこなすことが、人に差をつけるプラスαとなつて結実する。何でもコンピューターの時代であるが、少しでも本格的にやろうとしたら、このように文献を一つ一つ拾っていく昔ながらの手作業が、今後も永く続くと思われる。

これと当りをつけた雑誌を調べるときは、総目

次の有無を調査し、あればそれを利用する。このとき総目次を使うのは、手間を省くためではなく、チェックを多彩にすることであると考えるべきである。総目次や雑誌の前表紙についている目次は、主要記事だけであつたり副標題が略されていて、それに頼りきると思わぬ文献を逸し、後で臍をかむことがある。

戦前の文献を対象とした書誌は未だ充分に作られていないから、出版広告が取っ掛かりとして案外役立つ。もちろん広告のみで実際には出版しなかった例もあるから注意が必要だが、各分野で評価をうけている雑誌を中心に周辺を押えていけば、かなりの量を見出すことができよう。

引用資料・参考文献を次々に辿っていく芋蔓式検索法は、古くからある有効な方法であるが、この書誌記述は不完全な場合が多く、原本に遡るのにしばしば困難を来すことがある。研究者泣かせを防ぐためにも、基礎的な書誌知識はマスターして貰いたいものである。



現場で心掛けること

関心のある分野の資料は網羅的に買い込むことが、研究生活の第一歩である。しかし、2歩目を踏み出す頃には、どんなに足掻いても個人の資力では追い付けないほど本が欲しくなる。そうなったら図書館で見られる本は図書館に任せ、通常の流通ルートに乗らない資料に限って購入をしたい。

古本屋巡りをするさい、書棚に並べてある本は大抵図書館に納っているから、殆ど見る必要はない。棚の下に乱雑に平積みされているものとか、隈の方に置いてある本を重点的に目を光らせてい

ると、たまに掘り出し物に出会うことがある。

古書店は要所だけ見ればよいが、古本市・古書展では1冊1冊風流に見ていった方が逆に収穫が多い。横浜の古書展で順に見ていったとき、本の上に他のお客の荷物が置いてあった。始めそこはよけて行こうかと思ったが、念のため退けて貰うと、そこにその日最大の逸品を発見したことがある。

じっくり見ると言っても、古書市では開場後15分で目ぼしい本は全く無くなるから、はじめに斜め見をして、欲しい本は確保してしまわねばならない。文献に対する臭覚を研ぎ澄ますには、古書市へ行けばよいとよく言われるが、日頃古書市に出入りしていれば、得難い本は感じて自然にわかるようになり、斜め見のスピードもついてこよう。

ある程度資料が集まってしまうと、古書市へ出掛けても未見資料は減多にお目にかからなくなる。しかし、ここで手を抜いてはいけない。古本市ではあらゆる資料が混在しているため、普段は視界に入らないような文献に行き当たることもある。古書市で身についた文献一般に関する物知りの知識は、知的生活者にいつか重要なヒントをもたらすであろうし、自己を視野狭窄から救う場と考えることもできる。

古書市の開場30分前にできる行列の中では、インフォーマル・コミュニケーション(“見えざる大学”)が飛び交っている。行列に並ぶ人は業者であったり収集のプロ達であり、彼ら常連はそこでニュースや関係者の消息・裏話等を交換し合っているから、仲間になれば得ることが多い。



資料の扱い方

いろんな文献を扱うためには、多少は書誌学的知識が要求される。

著者名の書き方にも、筆名・変名・偽名・符牒・イニシャルといった様々なものがあり、なかには人を食ったような名さえある。これはその儘では

論文等に引用できないから、本名が著者が通常使用する筆名に直さねばならない。『近代人物号筆名辞典』(柏書房)等の参考図書は有名人しか収載していないから、そうでない者は文献の刊行背景を探って本人を明らかにしなければならない。

発行者で注意したいのは、私家版である。〇〇荘・△△閣・××文庫刊行と表示してあると出版社等と誤解しやすいが、著者の雅号・書齋名・住所を覚えておけば、あるいは判別できよう。

年月日の表示もいろいろである。大15.6月、昭47睦月念九夜、一壬子弥生中日、さつき初八、昭17.12中浣などはすぐわかるが、〇〇2周年記念日、△△の歓呼の声を窓外に聞きつつ擱筆、となると調べてみないことには何ともいえない。

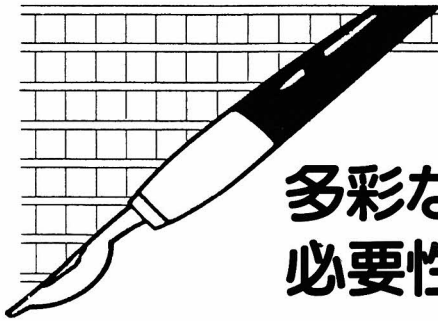


その精神(こころ)

文献は、ただ時間をかければ集まるというものではない。根を詰めること、すなわち私的時間とお金を最大限費やすことである。四六時中根を詰めて考えたとき、突然閃きがやってきて文献探索の隘路が開けることがある。人知を超えた啓示?は、思い入れの密度に比例するのではないかと思う。

いくら頑張っても個人の力には限度があるから、文献を把える人脈のネットを築くとよい。自分とは関心や分野を異にしたなるべく学外の人(平面を確保するため)とコネをつくって、情報が自然に流れ込んでくるようにするのである。

現場を踏むということは、刑事でなくとも大切である。地域に関する文献は地元の図書館が保存に責任をもつことになっているから、所蔵の確率が高い。出かけるときは、その図書館の創設はいつか、他の機関のコレクションを引き継いでいないか、さらに戦災等に遭っていないかも調べておくといよい。地元には地域文献のコレクターが必ずいるから、その人となつてを結ぶ方法も考えねばならない。



わたしの研究生生活 第9回

多彩な資料の選定基準の 必要性について……………

法学部教授 菊池 定信

1 研究生生活のはじめ

「わたしの研究生生活」は、学部卒業と同時に大学の研究室に入った時から始まる。その研究室には、長老教授の恩師をはじめ、助教授・講師および助手という偉い肩書をもった先生方がおられたから、私は雑用係の身分であつたことはいうまでもない。当然のことではあるが、私は、研究室では、いろいろの仕事を与えられた。例えば、原稿の清書・校正、講義や研究会などで使用する資料の準備のほか、専門図書の収集・整理、図書カードの作製なども主要な日課のひとつであつた。恩師は、休日・正月の前後1週間およびお盆の10日間を除き、毎日、大学の研究室で勉強されていたから、私もそれに倣って出勤しなければならず、古い本が積み重ねられている薄暗い研究室の片隅で過す毎日であつた。その頃、「上を向いて歩こう」という歌が流行していた。

2 講師になって

研究室に勤務してから数年を経て、私は講師になった。論文を書かなければならない。論文を書くためには、専門の多くの参考資料を必要とする。幸い研究室には、整備された図書カードがあり、また専門書に関しては、一般の大学図書館よりも遙かに揃っていたから、参考資料の収集については、それ程の不便を感じなかった。問題は、それらの参考資料の内容をどのように評価して位置づけ、どれを基礎として自分の考えを纏めるか、と

いう点にあつた。井戸が沢山あつても、貰い水は、良質のものからでなければならぬからである。

先にも述べたように、私は、研究室で図書を整理し、カードを作っていたのであるが、その際、それに掲載されている先覚の論文などを読みあさっていた。図書の整理中、そのなかに恩師の書き込みのある紙片などを発見すると、その部分の論文については、とくに興味をもって読んだものである。また研究室にいと、恩師から雑誌などに掲載中の学者の論文に対する評価や批判を聞く機会も多かった。研究室でのこのような体験は、実は、私が論文などをものするうえで、非常に役にたつものとなっている。というのは、当時の私には、先覚の論文などを手当たり次第読む機会があつても、それをどのように評価し、位置づけるべきか、というような点の判断力を欠いていたからである。つまり新しく掘られた井戸を見つけ、そこから水を借りてくることができても、その水を飲むと、みな美味に感じるのだから、どのような水の湧き出る井戸を掘ったらよいのか、その判断に迷っていたのである。そのような折、恩師から直接・間接の指導を受けた。結局、私の迷いは、水質を検査する基準を欠いている点に原因することもわかった。しかし浅学の私は、残念ながら、独自の判断基準を確立できるほどの能力をもっていない。論文をものするときは、恩師のそれによって自分の考えを纏めざるを得なかった。当時は、このようにして、若干の論文をものすることができたのである。

ただしそれが良質の水を湧き出す井戸となっているかどうかは、今でもわからない。

3 教授失格の弁

近年、私の専門に関する著書・論文集などが数多く出版されるようになったが、時間的余裕のないことをもつと理由として、それらを十分に検討しないまま、小論稿を書くようになっている。現在の多様な学説をまず把握すべきであるのに、これを怠っている。それだけではない。みずからの学説を示すには、まず諸学説に対する価値評価をしなければならないが、そのためには、その判断基準を確立しておく必要がある。判断基準のないところに、正確な価値評価は望めない。ところがその判断基準を何に求めるべきか、という方法的な研究をまだしていないのである。これでは、講師時代よりも劣る。教授として失格である、と今は亡き恩師から言われそうである。

序論で大部紙数を費やした。そろそろ本論に入らなければならない。

4 資料の選定基準の必要性

現在は情報化時代である、と言われている。私の専門とする法学のかぎられた特定の分野においても、そうである。毎月、多数の専門雑誌が出版されている。また内外の専門書や裁判例集などの刊行も多い。したがってあるテーマを本格的に研究しようとする、そのテーマによっては、これに係る資料が膨大となっており、その収集も大変な作業となる。その全てを収集することは、個人として不可能な場合もある。かりにその収集を全うしたとしても、今度は、その全部を活用することのできる価値があるのか、という問題がある。前に私は、現在の多様な学説を的確に評価して位置づけ、自説を展開するためには一定の基準を確立しておく必要がある、と述べてきたが、参考資料の収集についても同様のことがいえるのではな

いか、と思っている。つまり数ある図書その他の資料のなかから、どのようにして必要なものを選ぶかの問題である。これを解決するためには、資料選定の基準ないし方法に関する専門的研究が必要であるように思われる。

例えば、ある事項に関する文献を探そうとして、それに係る文献目録や図書館に備え付けのカードを調べてみる。この場合、電話帳に同一人名が沢山載っているのと同様に、同一著書名・同一論文名が沢山続いていることがある。それでも自分の専門とする分野の文献であれば、大概のものを見たり聞いたりしている場合が多いから、その選定・収集については、それ程の手間をかける必要がない。むしろ重要な文献の表示が欠落していることを嘆いたりする。ところが専門を少し離れると、事柄は一変する。専門外の文献を必要とする場合に、どれが適切なものかをまったく判断することができない。ことに卒業論文を指導している学生から、専門外の参考資料の選択・収集の方法について質問を受ける場合もある。しかし適切な助言をすることができないことも少なくない。事態は一層深刻である。

電話帳で相手方の電話番号を調べるときは、人名の次に住所が載っているから、これによって相手方を識別・特定することができる。観光地に旅行するときは、名所旧跡の案内図によって目的地に到達することができる。必要な参考資料を探知する場合においても、容易に選定できる基準ないし方法を考案されるべきではないだろうか。雑多な情報が氾濫する今日では、とくにその選定の必要性が望まれる。

図書資料に関する選定の基準ないし方法について、学問として体系的に研究され、それが近い将来、1つの専門的学際的研究として広く認知されるであろうことを期待している。

国士館に学んだ人

森 類 昭 明治44. 2. 11生。随筆家。鷗外の三男。母は志げ。誠之小学校、国士館中学二年で中退。中退後、姉の杏奴と絵の勉強を一時する。昭和16年、安宅美穂子と結婚。戦後いちじ文化学院美術科講師を勤め、出版社にも勤務。この後、昭和25年、観潮楼（文京区千駄木）あとに本屋“干菜書房”を開店。現在、この場所には“文京区立鷗外記念本郷図書館”が建てられている。

単行本には『鷗外の子供たちーあとに残されたものの記録ー』（光文社 昭31. 12）があり、幼年期の思い出と鷗外没後の遺族の生活を率直に描いて世に衝撃を与えた。雑誌に「不肖の子」（心 3巻9号 昭25. 9）「小倉日記」（軀外全集 月報 8 30巻附録 昭27. 1）「森家の兄弟」（世界 86号 昭28. 2）「父」（昭和文学全集 月報 別冊 昭30. 2）「鷗外の子供たち」（群像 11巻6号 昭31. 6）「父の思い出」（文芸 13巻12号 昭31. 7）「観潮楼跡」（国文学解釈と鑑賞 24巻9号 昭34. 8）「観潮楼の離れ」（文学散歩 15号 昭37. 10）がある。作品として、同人誌『小説と詩と評論』（昭38. 2 創刊）に小説「驟雨」（1号 昭38. 2）「市街八分」（6号 昭38. 9）「百舌鳥」（7号 昭38. 11）「醉眼」（14号 昭39. 11）「柿栗筍」（30号 昭41. 3）「細き川の流れ」（52号 昭43. 1）「裁量権」（71号 昭44. 9）、戯曲「草鞋虫のいこひ」（63号 昭43. 12）を発表した。

参考文献：日本近代文学大事典第3巻
日本近代文学館 編
講談社 昭52. 11
(浦田)

“文庫時代”その人気を探る!!

“文庫” いま図書館で最もエキサイティングな存在だ。開架室には、新潮・中公・講談社・岩波などの文庫が入っている。一般的に、大学図書館の棚には装丁カバーをとってしまうため、同じような色の本が並ぶことが多いが、この文庫達は目の醒めるような色彩を放っている。当初、大学図書館の色に合わないのではとの一部のご批判を横目に、この文庫達の利用は一般研究図書を脅かす勢いで伸びている。これをどう受止めるか探してみたい。

現在、第二次文庫革命（昭58～59）といわれており、各社鎬を削っている。その商品を見ると、第一に講談社（イン★ポケット）角川書店（月刊小説王）のような文庫判月刊誌が登場している。第二に河出書房新社（絵はがき文庫）プレイボーイ（写真文庫）など視覚化の急速な進展がある。ちなみに、第一次文庫革命は、中央公論社、文芸春秋など大手の出版社が文庫戦線に加わっていきなかで、角川文庫の変容、集英社（コバルトシリーズ）のように、名著・古典の普及版からエンターテインメント志向が強まった昭和50年頃である。

さて、ここでわが国の文庫ルーツを見れば、先駆者である岩波文庫（昭2）をはじめ、新潮文庫（昭3）、改造文庫（昭和4）である。文庫は幅広く世界の名著また学術的・研究的な内容を集め刊行し終期のない継続出版物で装丁や大きさなどが一定の図書である。

こうしてみると、今日一般に普及し身近に感じるこの文庫等は、内容的にかなり高く評価でき、なおかつ携帯に便利といえるところに人気の秘密があるようだ。

(宮田)

国士館大学附属図書館報 松陰 第9号 昭和60年4月1日

発行 国士館大学附属図書館 〒154 東京都世田谷区世田谷4-28-1 ☎ 03-422-5341
(内線) 館長室：541 庶務係：542 収書係：543 整理係：544 参考閲覧係：545 雑誌係：546